

窪俊二 (東北大学)

「ドイツ」の漫画はあるのか？ーグローバル化とローカル化ー

「ドイツの」コミックはあるのか。まず、「ドイツの」とは何を意味するのか。「ドイツ語」で描かれているからといってドイツという国を指すものではない。「ドイツ人による」としても、M.Schultheissのようにフランス語圏を活動の場としている漫画家もいる。「ドイツという地理的空間」では、ほとんどのコミックは外国のものだ。また、ドイツのコミック界を代表させることのできるような漫画家もいない。

1990年代後半に「コミック100年」を記念する事典が出版され、展覧会が開催されたが、ドイツ語圏の漫画家の名前はあまりない。また、ドイツのコミック市場では、その90%以上が外国のコミックで占められていると言われる。個々のコミックを読んでも、ドイツのものか外国のものか区別はつかない。1980年代にフランスの批評家が、「いろいろドイツのコミック (Deutsche Comics) はあるが、これぞドイツのコミック (der deutsche Comic) と言えるものはない」と言った。また、別の批評家は、「ドイツはコミックに関しては発展途上国である」とも言っている。

ドイツにはそもそも絵物語の豊かな伝統があった。19世紀の *Fliegende Blätter* や *Münchener Bilderbogen* などの絵物語があり、その伝統の上にユーモアや *Witz* などの言葉で表現される W. Busch の絵物語はある。このコミックの伝統は、その後、アメリカでドイツ出身の R. Dirks などによって発展をとげることになる。1920年代、30年代は世界的にコミック産業の成立期であるが、この時期はドイツではナチズムの時期と重なり、新しいコミックが描かれることはなかった。戦前のもので唯一ポピュラーになったものは『お父さんとぼく』(Vater und Sohn) くらいである。戦後になって、アメリカやイタリアから大量にコミックが流入してきた。ドイツの漫画家に残されたのは、外国のコミックの模倣であった。Hansrudi Wäscher や Rolf Kauka などがその代表である。この時期、コミックは大衆文化として認められ、根付くことはなかった。

この状況が変わるのは、1960年代末のカウンターカルチャー、アンダーグラウンド・カルチャーの時期である。学生層を中心として、大衆文化に対する肯定的態度が生まれ、かつての *satirisch-humoristisch* なコミックの伝統につながる、後に *Neue Frankfurter Schule* とも呼ばれる漫画家とその周辺の漫画家が台頭するようになる。彼らは、*satirisch* な雑誌を発表の舞台とし、大真面目に政治を論じるのではなく、幅広いテーマをバナーな日常を通して表現した。彼らに共通するのはその「啓蒙性」である。その後、1990年代にある批評家が、「ドイツでは〈真面目な〉コミックではもはややっていけない。Brösel、Ralf König、Walter Moers のように楽しいものを描くことができなければ駄目だ」と言ったが、〈真面目な〉ドイツのコミックというのは、いわゆる教育的啓蒙的コミックを指す。ここに来て読者の変化が認められる。

90%以上が外国のコミックで占められているドイツのコミック文化はグローバル化している。しかしながら、残りの10%はドイツのコミックである。ドイツのコミック文化がグローバル化するということは、1) 外国の作品に対して市場が開かれている、2) ドイツのコミックが

外国へも輸出される、ことなどを意味する。つまり、外国でも勝負が出来る、国内で生き残っているコミックがあることなども意味する。従って、どういう分野の、どういうコミックが、なぜ生き残っているのかを問うことは意味のあることであろう。

まず、国内で生き残ったコミックは、何らかの特色があったからこそ生き残る。ここでは **satirisch** な雑誌を舞台に活躍し、日常生活を通して政治・社会を描いた漫画家たちを挙げることが出来る。**satirisch** であればあるほど、それが描かれた国、土地、言葉に依存することが多い。あるいは、表現手段として方言という非常にローカルな要素を使うことも同様である。**Brösel** がその代表であろう。このような文化的特殊性に根ざした表現は外国語に翻訳することは難しい。

二つ目に、外国のコミックに勝てるものとして、その特殊なテーマ性がある。ホモセクシュアルをユーモラスに描く **Ralf König** のコミック、フェミニズム・コミックの第一人者であり、男女の関係をユーモラスに描く **Franziska Becker** が挙げられる。

三つ目のものとして、同じ土俵で闘って外国のコミックに勝てるものがあるであろう。フランス語圏からの逆輸入である **Matthias Schutheiss** や **Chris Scheuer**、コミックの美術的側面を重視する前衛的漫画家たちを挙げることが出来る。

四つ目としては、外国のコミックに勝てないけれども生き残れるものがある。これは外国のコミックをローカライズして描く **Wäscher** や **Kauka** のような漫画家たちのコミックである。

上記のうち最初の二つに共通しているのは、ドイツのコミックの伝統とも言える風刺とユーモアである。この風刺とユーモアは、絵と言うより言葉による風刺、ユーモアという側面が強いこともドイツのコミックの特徴である。また、読者層も子供というよりは成人である。

ドイツにおけるコミック研究において、コミックは、一般的に、「青少年向け」の文化として研究され、一過性の、低俗な文化としてとらえる傾向が強かった。だからこそ、その大衆的娯楽の対極にあるものとして、教育的、風刺的、啓蒙的コミックがドイツで高く評価されたとと言える。

窪俊一（くぼ・しゅんいち）

1955年生まれ。東北大学大学院文学研究科修士課程卒業（独文専攻）。広島大学助手を経て、1987年より東北大学教養学部にて教鞭を執る。1993年より東北大学大学院情報科学研究科准教授（メディア情報学）。主な研究分野：マンガを中心とするポピュラーカルチャー研究、メディアリテラシー研究、マルクス・エンゲルスのデジタル化など。主な著作：S.Kubo(共著): „Grüß Gott! Da bin ich wieder! /Karl Marx in der Karikatur (カリカチュアの中のカール・マルクス)“ (2008)、(共編・著) 『ナイスエイジのIT革命』(2001)、『「人文社会情報科学」入門』東北大学出版会 (2009) など。